

令和五年度 奈良県租税教育推進連絡協議会長賞

ほんの些細な出来事から

奈良大学附属高等学校 二年 野田 優来

「どんなものでもいい、たくさん本を読みなさい。」

私は、昨年から学校で小論文講習を受けている。放課後や長期休みにも課題に取り組み、少しずつ文章を上手に書けるように練習している真っ最中だ。先日、初めて小論文コンテストに応募すると決断したときに、講習中によく担当の先生が言っていたその言葉が思い浮かんだ。読書は知識を増やすため大切だと教わったのだ。そして、私は情報を集めるために近くの公立図書館に足を運んだ。正直、「誰でも自由に使える図書館だから使い古したものやボロボロな本が多いただろうな。」と思っていたばかりに、あまり信用はしていなかった。しかし、そこには学校の図書館とは比較できないほど、棚には豊富な種類できれいな本が埋め尽くされていた。さらに子供でも利用しやすい環境が十分に整っていた。私の思い込みは見事に晴れ、感情が高まり無意識に目的の本探しの後も様々なジャンルの本に浸っていた。

そんな当たり前前に利用していた図書館も実は税金でまかなわれていることを初めて知った。私は他にどんな場面で税金が使われているのだろうかと疑問を抱いた。そして、税金のことを学ぶためまた本を借りに訪れた。税金には国に納める国税と地方公共団体へ納める地方税が存在し、全ての人が豊かで充実した日々を送るためには納税が必要不可欠なのだ。また、公共図書館の他に小・中学校の教材や設備、警察署や消防署、病院など生活の身近なところで社会を支える役割をしていることが分かった。さらに、税金には納め方に種類があり税金を負担する人と納税者が同じ直接税と異なる間接税に分けられる。直接税では納める能力が高いと考えられる人が多く納めることで立場が異なる人達が公平になるような制度だ。

一方で、「税金を払いたくない。」という意見もある。本当に税金は無くなっていいのだろうか。確かに、払わなかった分のお金が手元に残るという利点がある。しかし、現在国民で負担をして施設やサービスが受けられている状態の全てに料金がかかってしまい自己負担になるかもしれない。貧富の格差が生じて、一部の富裕層だけが幸せに暮らしていける世の中は不平等ではないだろうか。よって、税金は全ての人で背負い社会を運営していくのに欠かせないものだと考える。

私は、今まで税金について身近であるはずなのに理解不足だった。世の中のあらゆる場所に使われているのに無関心のままではいけないと思う。そして将来は、社会を共に支えていく側として正しく納税をして貢献できる大人になりたい。